



「薫風自南来」

社会福祉法人つるかわ学園
理事長 廣本 肇

初夏の風が新緑のあいだを吹き抜けるこの時季、茶室によく掛けられる禅語ですが「薫風自南来」、くふうみなみよりきたるといふのがあります。あたりまえのように爽やかな風が南から吹いてきて全てのもの的心を爽やかにしてくれる、そんな様子を表しています。

利害や損得、後悔や迷いはもとより、窮屈な規範もありがたそんな悟りも忘れ、さらりサッパリした涼しい境地で、少しも力むことなく、当たり前前を無理せず、当たり前前に行うことが爽やかに生きるための知恵であると説く心が軽くなる教えですと言われています。

雨が降り始める季節とはいえ、「六月の花嫁」だって、そういう雰囲気でも月選びに参加しています。

今時の季節の不順さ加減は番狂わせを演じて様々ですが、日本人はかたくなに、そういう時期を信じた生

活習慣を大事にしています。

社会福祉法人つるかわ学園
つるかわ学園を支える会
☎195-0051
東京都町田市真光寺町
186番地
TEL (042)735-2220
FAX (042)736-6374
HP:tsurukawa-gakuen.com

「目には青葉山ほととぎす初鯉」この句を詠んだ山口素堂は江戸時代の俳人ですが、青葉、ほととぎす、初鯉は、いずれも夏の季語です。最初に、「目には」とだけいってあとの「耳には」「口には」を省略し、初夏の風物三つを読み手に五感で感じさせます。少ない文字数で五月の世界観を描く優れた表現技法です。初鯉は江戸時代、「まな板に小判一枚初鯉」は、それほど、極めて高価なものだったのですね。

「節は五月にしく月はなし菖蒲蓬などのかをりあびたるいみじうをかし」清少納言「枕草子」の一節で、一年を通して節目はたくさんあるけれど菖蒲や蓬の香りも爽やかで五月が一番素晴らしいと言っています。最近ではテレビで放映しても、家庭では菖蒲湯はあまりしないでしょう。

「新茶」もこの季節の話題になります。「お茶」と言えば、石田三成と豊臣秀吉の出会いにまつわる「三

献茶」の逸話が有名ですね。秀吉が鷹狩りの帰り、子供だった三成がお茶を供するのですが、一杯目は喉の渴きを潤すことに重点を置き、一気に飲んでも火傷しないようにぬるめの湯で出します。二杯目は、喉の渴きは潤されたので、落ち着いて本来のお茶の味を堪能できるように、少し熱めのお茶を先ほどより量を少なめに出します。三杯目は喉も心も潤されたので、量もさらに少なめにして締め一杯として熱めで出します。それら三杯にはお湯の温度の低い順から味わえる、甘さ、渋さ、苦さと言う点でも、もてなしたのではないかと言われています。

日本独特の優雅なしぐさがまだまだ残っているかも知れない作法と礼儀を、今、外国から日本に遊びに来る人たちが再発見しているのだから滑稽ですね。静岡に暮らしていて、茶どころなのに、改めて聞かされると知らない事だらけな私は驚きの幸せをゾクゾクとさせられます。

四月、五月、六月と、時の流れに身を寄せて、いくつか拾い「そだね」で繋いでみましたが、やはり、桜もどきを今一度シテみたい。

「散ればこそ、いとど桜はめでたけれ憂き世になにか久しかるべき」桜絶賛論の中にあって有名な反歌です。桜は惜しまれて散るからこそ素晴らしい、世に永遠なるものは何もないのだからとよまれています。桜の一生を美意識のある生き方にてとえているのかもしれない。

去年の十一月、肺炎で入院しました。自分の体が、崩れるように倒れていき、意識が遠のいていくのが僅か感じ、時間の経過がよく分からずに気づいたのは病院でした。三週間退院したのですが、入院中、CT検査所見で、肺に腫瘍が見られるということ、すぐに、静岡県立がんセンターに行きました。三か月ほど検査の連続で通いました。「まさしく癌だ」と言われたのは三月です。癌を前提としつつ「診断」に時間がかかりました。

八十四。外科的オペは無理。抗がん剤、副作用が激しく体力的に大変だし、また、放射線も五十歩百歩、わずかな命が、やや伸びるだけと言う説明を聞きました。残りは、緩和ケアです。痛みを抑え、精神的な戦いです。余命は三か月と宣告されました。ただ、免疫抗体が強くあるらしく、頼みは、その辺らしいのです。

「過ぎゆく時を捉えよ。時々刻々を善用せよ。人生は短き春にして人は花なり」十八世紀、英国で「文壇の大御所」と呼ばれたサミュエル・ジョンソンの言葉があります。春の息吹を感じられる時季は短いものです。素晴らしいこの季節一日一日を大切に暮らしたいですね。

医者には「残り少ない時間、好きな事して暮らしてください」という死亡診断書をいただきましたが「違つ言葉、考えたらいかが」と、内心思い、好きな事って何かな、と、ふと思つたのです。先々の約束、どこまで果たせるのか、「そだね」。が、本音です。

平成三十年度新体制となりました各事業所管理者よりご挨拶申し上げます。



平成三十年四月一日付で、つるかわ学園施設長に就任いたしました月岡と申します。身に余る重責ではありますが、新たな気持ちで全力を尽くす覚悟です。

つるかわ学園は昭和三十五年、知的な発達に障害のある児童の入所型施設として創立されました(当時はかねご学園)。以来、様々な変遷を辿り、平成六年には、成人施設へと児者転換を行い、現在の生活棟での生活がスタートしました。私が入職したのはその翌年の平成七年、当時は職員数も現在の半分程度ではありましたが、利用者の方々やご家族も職員も皆若く、家庭的で温かく一体的にワイワイと楽しく過ごしていたように思います。

そんな時代から二十年以上経過し、その当時では想像もできなかった大きな課題が、利用者の方々の障害の変化や加齢に伴う身体的・体力的な衰え等の重度化です。これまで以上に、重度・高齢化に適切に対応していくことが重要と考えます。「心豊かに安心した暮らし」ができるよ

う、職員が一丸となり、笑顔で様々な課題に向き合っています。

地域や関係者等の多くの方々の力をおかりして、地域の中の施設として、信頼と安心が得られる施設であるように努力したいと思えます。

引き続き指導、ご鞭撻のほど、よろしくお願いいたします。



新年度が始まり、新規利用者の入寮も一段落をしましたが、2年の利用期間の終了を間近に控えた利用者への地域移行準備もあり、なんとなく忙しい気持ちです。

四月八日には新年度最初の行事として「オリエンテーション&バーベキュー」が行われました。通勤寮で過ごすことの目的などを改めて利用者の方に伝え、それぞれの目標を確認してもらおうと、新しい利用者の方を含めた懇親の場として位置付けた取り組みです。

私が寮長になって四年が経ちます。改めて自分の仕事を振り返り、着実な歩みを進めていきたいと思えます。

職員一同、努力してまいりますので、よろしく願っています。



地域生活援助センター「フクシア」

もすでに十年近くが経過しました。利用者・世話人・職員総勢ではすでに百十名を超える規模となっております。当法人が最初に開設したグループホームが平成九年十月一日。その後町田通勤寮卒寮者受け入れを進め次々と開設をし、現在では二事業所十六ユニットを運営するまでに至りました。平成三十年四月には行政が推進する「サテライト型住居」も開設することができました。

しかし、増加している利用者の一部には「高齢化」が顕著に表れてきていることも今後の課題として考えたいかなくはなりません。過去には「有料老人ホーム」に入所されたケースもありますが、金銭的に余裕のある方だからこそ実現出来たことです。比較的軽度の障害をお持ちの方が利用されているフクシアですが、高齢となり医療的な部分が日常生活の上で必要不可欠となる場合も考えられます。そのための対策の一つとして、当法人が運営しているグループホームへの移管を平成三十年四月に実施しました。

今後はグループホーム全体として、入所者を増やすばかりではなく単身生活が可能と思われる方を地域で活躍してもらう支援、及び高齢化した方への生活状況に合わせた環境への移管等々が求められることと思われれます。



ドリドリーム管理者に就任しました外川です。共同生活援助事業所ドリドリームはグループホームドリドリーム、六名の定員、平成二十年十月開設。グループホームのつた、九名の定員で平成二十二年四月開設し、少人数で共同生活を営み、地域社会となじみながら家庭と似た環境で暮らしています。法人の理念に基づき、利用者が地域において共同して自立した日常生活または社会生活を営むことができるよう、当該利用者の身体および精神の状況並びにその置かれている環境に応じて、共同生活住居において、入浴、排泄または食事等の介護、相談その他の日常生活上の援助を適切かつ効果的に行うことを目的としています。利用者においては、加齢に伴う変化は早く、身体的、体力的な衰えや機能の低下は年々顕著になっており、利用者の変化に合わせた支援が求められます。重度化し、継続的に医療的なサポートを必要とするために、つるかわ学園に移行する利用者や高齢化によるグループホーム間での移行等、高齢化の対応策を検討しなければいけません。事業所として人材の確保や育成、研修計画、虐待防止体制の再構築、運営体制の再検討等、多々課題はあるものの、一つ一つクリアしながら、バックアップ施設である、つるかわ

学園と連携を図りながら取り組んでいきたいと思えます。そして、利用者の方、一人一人が「ここで暮らしてよかった」、家庭の様に「とても居心地がいい」と思えるようなグループホームにしたいと思えます。

町田市障がい者就労・生活支援センターりんく兼つるかわ学園職業準備支援センター
管理者 藤本英理子

この度、町田市障がい者就労・生活支援センターりんく及びつるかわ学園職業準備支援センターの管理者に着任いたしました。浅学非才の身ではございますが、全力を傾注、皆様のご支援を頂戴しながら、この重責を全うしていく所存でございます。何卒、ご指導ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

就労支援の現状についてですが、前任の滝島管理者がふれておりましたが、障害者雇用率の上昇や精神障害の方の雇用の義務化等、様々な障害者雇用促進の動きがありますが、その一方で雇用現場での障害に対する理解の浸透の難しさを痛感しています。更に、障害のある方々からの「特別扱い」「障害者扱いされる」とへの疑問の訴え等、個人の尊厳にも関わる問題も複雑に絡み合い、携わる職員一人一人の人間力のようなものを試されているようにも感じます。ご本人の意思決定にどのよう

寄り添っていけば良いのか、就労支援に携わる者として、丁寧に向き合っていきたいと思えます。障害者雇用、福祉就労に関わらず、働くこと、働き続けることの喜びを得られる場を共に探し、企業にも様々な働きかけを行い、ご本人、企業にとつて両者が満足出来るような環境づくりを出来る一助になれるよう、関係機関との連携や地域への各事業の周知等、積極的に活動して参りたいと存じます。

つるかわ学園相談支援センター
管理者 芹澤 政人

平成三十年度障害福祉サービス等報酬改定では、「障害福祉サービスの持続可能性の確保」として、計画相談支援における質の高い事業者の評価が掲げられています。具体的には、モニタリング実施標準期間の見直し、相談支援専門員一人当たりの標準担当件数の設定、特定相談事業所加算の見直し、高い質と専門性を評価する加算の創設等の見直しが示されています。

質の高い相談支援体制の構築には、相談支援事業所の運営基盤の安定や相談支援専門員の人材育成、確保は重要課題となります。その為には、法人内の計画相談支援体制の基盤の見直しを行い、整備するとともに地域の各関係機関との連携強化を行う必要があります。また、日々の

各事業所の活動の様子

「つるかわ学園」平成三十年度運動会
支援スタッフ 岩崎 龍



五月十三日(日)につるかわ学園の運動会が行われました。利用者さん、スタッフ、ボランティアの方々、ご家族やご来賓、地域の方々を含め百名近くの方々がグラウンドに集まりました。十時に入場行進を開始し、意気

計画相談支援に携わる中で、ニーズの多様化や高齢化への柔軟な対応がより重要であることを実感しています。適宜最適な支援と事業運営ができるように努めていきます。



揚々と皆さんがグラウンドの中央に集まります。開会式では機材トラブルに見舞われ、学園歌のテープが止まってしまったという事態に…。しかし、周りの方のフォローによって、アカペラで見事歌い切りました。この光景はすぐく印象に残り、感動的な場面でした。災い転じて福となす。競技はパン取り競争、エビカニクストよさこいを含めたアトラクション、玉入れ、混合リレーとスムーズに進行し、利用者さんも皆、終始笑顔で元氣いっぱいな姿を見せてくれました。天候も不安でしたが、涼しい風が吹く中怪我もなく無事に半日を終えることができました。ご協力いただきました皆様、本当にありがとうございました。

つるかわ学園 虐待の防止に向けた取り組み

つるかわ学園 地域支援部長

芹澤 政人



障害者支援施設つるかわ学園では、虐待防止委員会、身体拘束改善・廃止委員会を設置し、虐待等不適切行為を未然に防ぐために取り組んでいます。つるかわ学園の障害者虐待防止マニュアルの中で、虐待は被害者の尊厳を著しく傷つけるものであり、虐待が発生してからの対応よりも虐待を未然に防ぐことが重要としています。日々の支援の振り返りの為、チェックリストを用いた職員への権利擁護の啓発、強度行動障害への支援、グループワークの内部研修の実施等。また、各種外部研修への積極的参加も具体的対策の概要としています。その外部研修参加の一つとして、私自身、平成二十九年年度東京都障害者虐待防止・権利擁護研修の障害者施設等管理者コースを受講いたしました。

二日間の研修であり、施設・事業所における虐待防止体制の整備について改めて考える機会となりました。虐待防止の共通の構図として、「虐待は密室の環境で行われる」「障害者の権利を侵害する小さな出来事から心身に傷を負わせる行為にまで次第にエスカレートしていく」「職員に行動障害などに対する専門的な知識や技術がない場合に起こりやすい」などが挙げられていました。

一番大切なことは、小さな出来事とらえる「ハート」であり、個々の職員がその「ハート」を持てているか、共有できているか。「ハート」を共有するには、職員とよく話すことが重要であり、その職員に「権利擁護の取り組み」に参加してもらうこと。他の現場を見る機会をつくる等。

今回の外部研修の学びから、その「ハート」を共有するため、平成三十年一月二十五日に「つるかわ学園虐待防止・権利擁護研修（内部研修）を開催しました。法人内の各事業所の職員六十一名が参加し、研修では、五、六名のグループでグループワークを実施して「小さな出来事」について意見交換し、共有しました。

グループワークで使用した「小さな出来事（担当が作った事例）」の一つを紹介します。「マヨネーズが好物で毎食ご飯にかけている。健康診断では異常ないが、体重が増加傾向。職員は健康への影響を考慮して、マヨネーズをご飯にかけることを禁止した。本人は納得できていない様子で不満に感じている」。

支援では、この事例のように判断に悩む場面が多くあり、その小さな出来事（不適切な支援）は、「グレーゾーン」と表現されることもあり、利用者が利用する「プラットフォーム」であると言えます。虐待かどうかの判断は利用者自身になります。大切なのは個人の問題としての捉えではなく、法人の問題として捉え、共有することだと考えます。



現場の支援をよりよいものにするのが重要であり、今後もチーム、組織全体で「どうすればより良い支援ができるか」を考え虐待防止・権利擁護に取り組んでいきたいと思っております。

職員インタビュー Vol.3

氏名 近藤 洋

- Q1 出身地と出身校
出身地…東京都調布市
出身校…日本福祉教育専門学校
- Q2 入職日
平成十五年四月一日
- Q3 所属
地域生活援助センターフクシア
- Q4 入職のきっかけ
高校卒業直前までは車かバイクの整備関係の専門へ通うつもりだったが、ちょうど祖母の介護が必要となってきたため、何を思ったか福祉の専門学校に進路変更した。
- Q5 働いての感想
前職を退職してすぐハローワークで支援員の求人を探していたが、まず求人には無い状況だった。奇跡的に求人があり、応募した。十三倍ぐらいの倍率を奇跡的に通過した。
- Q6 今後の抱負
体調を崩さないように頑張りたい。
- Q7 リフレッシュ法
犬の散歩
- Q8 趣味
家でグダグダすること
スポーツ観戦
ゲーム
- Q9 私の一押し
ケルヒャーでの高圧洗浄。充実感・達成感がやばい。

つるかわ学園を 支える会のご案内

「支える会」について

国家的財政困難と世情不安定の中にあつて、施設も苦しい状況に置かれています。私達は私達なりに苦しさの中にあつても福祉を支える者として努力を惜しまず頑張っています。今一步の力の支えをこつした形で求めるのは本当に心苦しいのですが、市民の皆様は小さな善意はやがて大きな力を生む礎となる事をお約束します。

どうか「つるかわ学園」を支える会にご入会し力を添えてくださいますようお願い申し上げます。

会費

「つるかわ学園を支える会」の会費は、一口年額二千円ですが、ひとり何口か入っていたら、こつとを歓迎、お願いしております。

会員の方々には、毎年三回発行するつるかわ学園の機関誌「つるかわ」をお送りし、学園の様子を続けてご報告するとともに、この人達の幸せを願う者同志としての親交を深めます。

入会方法

入会してくださる方は、振込用紙を学園にご請求下さい。

振替口座番号

〇〇一一〇一七七一一九四〇二九加入者
社会福祉法人 つるかわ学園

つるかわ学園 ホームページ

日常のようす、行事のお知らせ等がご覧になれます

アドレスはこちら!!
HP: tsurukawa-gakuen.com

